

アカガイ *Scapharca broughtonii* (Schrenck) (和鈔) 赤介



フネガイ科 殻長 10cm。殻は良く膨らみ、殻表は黒褐色の皮で覆われている (写真左)。螺肋 42 本前後。蝶番は直線状で細かい歯が並んでいる。貝殻の内側は白い陶器質。分布は北海道南部以南。

アカガイの身が赤いのは、血液の中にヘモグロビン系の赤い血色素 (エリスロクルオリン) を含むため、貝の名前が身の色から付くのは珍しい。(他にアオミオカタニシ等)。

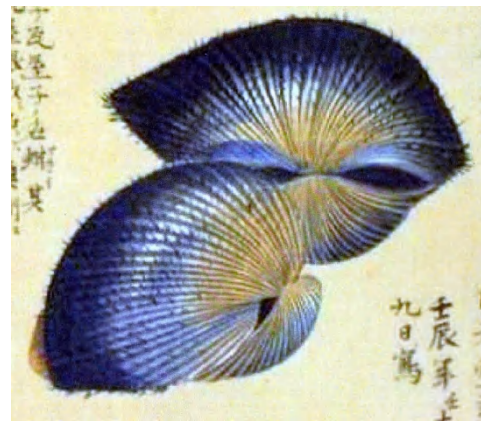
産卵期は 6-9 月、親貝から卵と精子が放出され、体外で受精。プランクトン生活の後、殻長 250 μ m ほどで、海底生活に移る。ただ、直接着底すると海底に潜り込んでしまうため、他物 (貝殻等) に足糸で付着する (写真下左: バカガイの殻に付着)。

1 年で 6cm、2 年で 8cm、3 年で 10cm。生物的最小形は 5.5~6.5cm。
大型記録: 殻長 67.2mm、殻巾 57.5mm、殻高 43.9mm、体重 89.9g。(羽田空港浅場 1975 年 3 月採捕)

天敵はヒトデ。腕の長さ 7~8cm のヒトデは殻長 2cm のアカガイを 1 日 4.3 個、殻長 3.5cm のものを 1 日 1 個食べる (奥谷喬司 2003 年 軟体動物二十面相 東海大出版会)。



バカガイの殻に付着したアカガイ稚貝



アカガイ絵図 梅園介譜 天保 10 年(1839 年)

きさがい

昔の名前は『きさがい』。漢字では蚶貝、漢和辞典（大修館書店）では「蚶」一文字でアカガイとなっている。書物では「和名類聚」（源 順著）平安時代延長 8 年(930 年)に書かれている。なお、大国主命が兄に騙され、赤猪といわれた焼けた大岩を抱き、大火傷の折、「きさがいひめ」（蚶貝姫）と「うむぎひめ」（蛤姫）が助けたとある（古事記）。

アカガイの化石

東京都内湾の貝桁調査で大型アカガイ（殻長約 15cm）の死殻を採捕することがある。また、羽田空港浅場を歩くと、多数の貝殻が打ちあがっているが、現在湾奥に生息していると思えない貝殻も多い。これらは縄文時代の貝類の遺骸（化石）である。

『縄文海進』（じょうもんかいしん）。これは地球の温暖化により縄文時代に海水面の上昇があったこと、海面が今より 2～3m 高かった。縄文時代前期（約 6000 年前）にピークを迎えている。この海進現象は東京の有楽町で最初に調べられたこともあり「有楽町海進」とも呼ばれている。

この当時の海岸線は貝塚の分布域でも確認することが出来る。東京湾は陸地に深く入り込み、埼玉県の川越・大宮・久喜・栗橋、千葉県の野田・流山辺りまで海になっていた。この海域を「奥東京湾」とも言う。

当時の海底は軟弱な地層であり（海底沖積層）、この地層から多数の貝化石が産出する。これら貝化石は全て現生種と同じで、絶滅種は含まれていない。ただ、当時の気候は今より温暖のため、水温も高かった。そのため現在の東京湾奥には生息しない種類も多い。

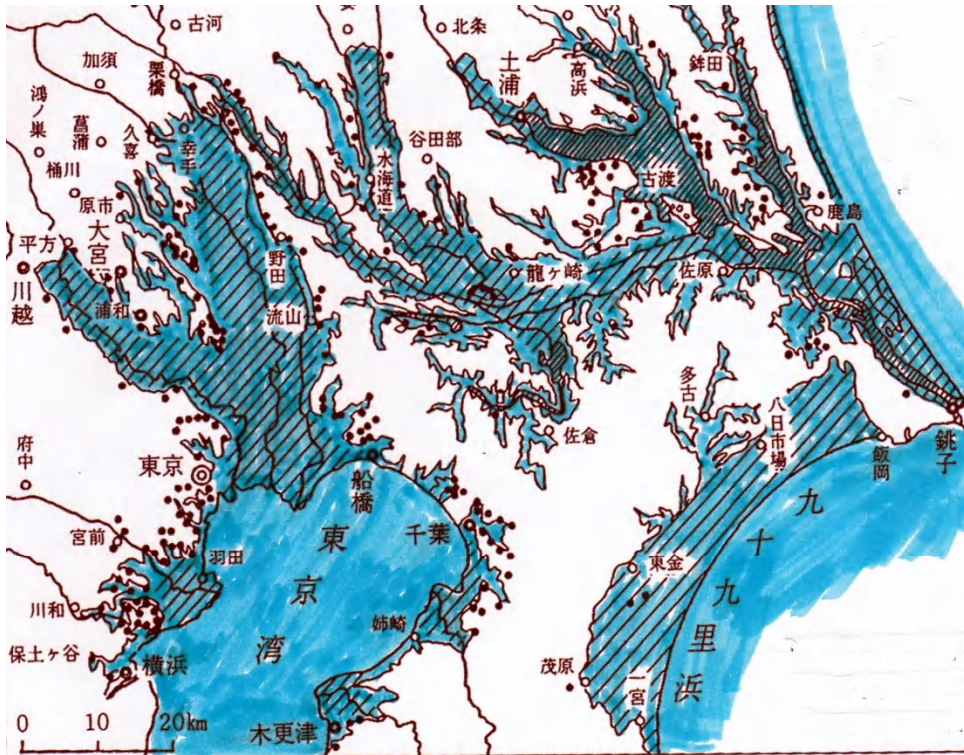
従って、東京湾奥で貝殻を採集した時、今生息している貝の死殻か、縄文時代の貝化石かの判定をする必要がある。

打上の多い 1 例としてウラカガミガイを図示した。



写真左：大型のアカガイ(化石 殻長 15cm)

写真右：ウラカガミガイ *Dosinella angulosa* (Philippi) (化石 殻長 5cm)



縄文時代前期の海岸線 青色斜線：縄文時代前期の海域部分

●：貝塚 東木龍七（1926年 加筆）

* 東木龍七（1926年）地形と貝塚分布より見た関東低地の旧海岸線 地理学評論
12巻7-9号 日本地理学会

* 松島義章（2006年）貝が語る縄文海進 有隣新書

アカニシ *Rapana venosa* (Valenciennes) (啓蒙) 紅螺



アッキガイ科 殻は大型、肩角上に結節列を生じる。殻口は広く、内面は朱色で美しい。分布は北海道南部以南。

肉食性でアサリ等を捕食する。食べ方は歯舌（やすり状の歯）と口から出す酸により、